

戦争とたたかう

久田 栄正
水島 朝穂 著

太平洋戦争について、私たちの前によく『坂の上の雲』に匹敵する本が生まれた。司馬遼太郎氏の名作が、日露戦争の刻々の経過を追体験させるのと同じように、この本は私たちがそこに配置されていたかもしれない戦争の局面を再現し、息もつかせぬ迫力をもっている。

しかも、小説とは違って二人の憲法学者によるこの戦記は、記憶と記録とをどこどん付き合わせて検証された事実の集成である。フイリン戦線という領域に限定されていることは、けっして本書の功績を殺ぐものではない。著者の一人・

久田氏があくまで誠実に自己の体験と内面を語っている、その聞き手でもある水

島氏は大本営や前線司令部など軍の命令系統の各段階の決定過程をこまかく調べて、戦闘局面の全体構造をみごとに再現していく。

画期的な軍隊研究

上なく具体的に切実な経過のなかでたどらせてくれる。

戦争体験を風化させないためにどんな手だてが必要か、という問題に著者たちは実践によって鮮やかな回答を提示した。個人の識か

つまり『坂の上の雲』が秋山好古・真之という主人公の判断と行動を、状況の構造連関のなかで描きぬいたのとひとしく、この本は、兵役に従っても倫理にそむく行為はすまいと決意していた一青年が追い込まれていった現代戦を、この

れた状況の決定的条件群を的確に再現してはじめて、その時、その場での迷い、苦しみ、怒り、悲しみが追体験可能なものとなる。その方法を切り開いたことにこそ、ここかしの記述のみごとさを超える貢献がある。

兵營の内務班で公認されていたビンタなどの私情による制裁の慣習が、ひとたび敗走となると將軍や参謀のほうで我先に逃げだしてゆくエゴイズムの縦社会にびったりと照応している。二人の著者は、いま学校で横行するいじめこそ、内務班的な日本の社会心理のよみがえりだと警告している。戦後の開幕期になされた「日本の軍隊」の研究は、社会科学の再出発を象徴する出来事だった。いま軍隊研究がこの曇感あふれる業績によって画期を示したことは、日本の文化科学の充実を告げる標本であろう。

(日本評論社・二、九〇
〇円)

戦争とたたかろう

久田 栄正・水島 朝穂著

戦争を知らない世代から戦争体験者への素朴で痛切な質問に「なぜ、戦争とたたかわなかつたのか」というのがある。古希を超えた憲法学者の従軍体験を、同学の後輩が聞き書きする

一方で資料を渉猟、太平洋戦争の歴史の中に位置づけたこの本は、その見本答案の一つと評価できよう。「戦争する兵隊ではなく、戦争に対して自分なりに抵抗する兵隊になろう」とした人間の優れた記録だ。とくに若い人たちにすすめたい。

一九一五（大正四）年に生まれ、北海道の屯田兵村で育つた久田は、反骨精神の盛んな父親の影響で、幼年期から権威と暴

己を通す

抵抗の記録

久田の部隊の生存者は三百三十一人。ただ、久田は敵を殺すことはせずになだ。

力を嫌う。天皇機関説事件さなかの三五（昭和十）年、入学した旧制四高では軍事教練服拒否事件を起こし、京大では憲法研究会を隠れみのにマルクスを讀んだ。「戦争拒否ならば、刑務所に行くか自殺するしかない」時代であり、四高時代「帝國主義戦争反対」に正面から挑んで捕まり、発狂して死んだ生徒を見ており、「国賊・非国民といわれないようにして国賊・非国民をやる」と決心する。

就職、結婚して間もない四二年、補充兵として金沢に入営。陸軍の内務班生活の規則主義、

管理主義、「人より物」の思想、「私的制裁」の内側が、水島の調査もあつて構造的に明らかにされている。満州監獄。拒

◇ひさだ・せいせい 一九一

五年石川県生まれ。京大法学部

卒。北海道学芸大教授などを経

て札幌学院大法学部教授。

◇みずしま・あさは 一九五

三年東京生まれ。早大大学院法

学研究科修了。札幌学院大法学